

- | | | |
|-----------------------|--------|-------------|
| 1. 事業細目：セタシジミ増殖技術開発事業 | 予算額 | 11,700千円 |
| 2. 研究名：セタシジミの分布状況について | 予算区分 | 国補 |
| 3. 研究期間：昭63年度～平成4年度 | 4. 担当者 | 水谷、橋本、沢田、西森 |

5. 目的

セタシジミの分布の現況と資源量を把握し、再生産機構の解明をはかり、セタシジミ資源回復の資料とする。

6. 方法

- (1) 7月下旬～8月上旬に南湖8ヶ所、北湖19ヶ所で潜水によるセタシジミの枠取り(50cm×50cm、網目2mm)採集を行った。
- (2) また、手繰第3種漁業(貝曳網)による採集調査を12月中旬に前記同様の水域で実施した。採集方法はマングワ(1.4×0.2m)を船速約1.6m/secで1～3分間曳網した。
- (3) 毎月1回、松原地先の漁場で貝曳網による採集調査を実施した。(船速1m/sec.20分間曳網)

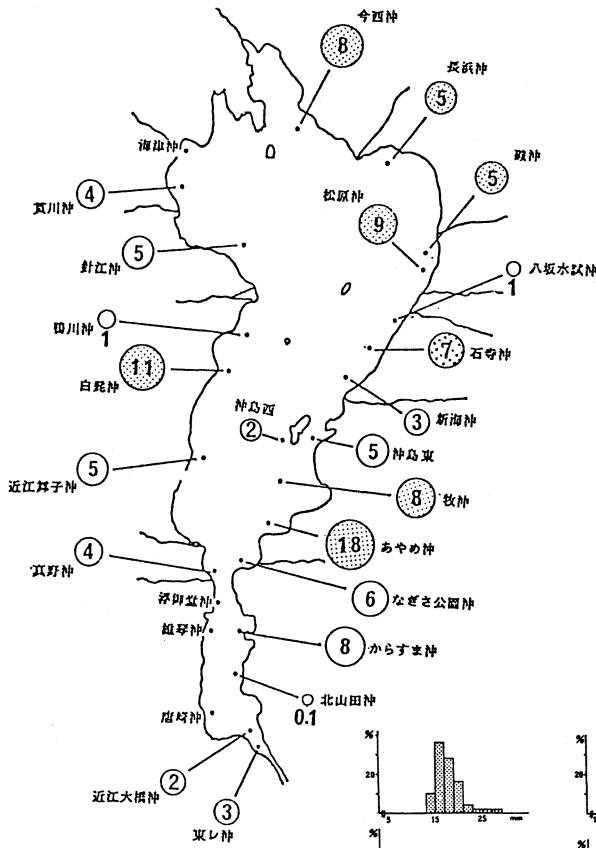
- (4) 採集物は砂礫ごと容器に入れ、帰場後、種類別の個体数と体型の測定を行った。
- (5) 潜水調査時には、漁場環境調査として、底泥の水温と ϕ 38.5mmの筒による表層泥の採集を行い分析した。分析法は常法。
- (6) 貝採捕漁業者の代表9人に対し、9月から漁獲日誌の記載を依頼し、貝類の漁獲状況調査を実施した。

7. 結果の概要

- (1) 潜水調査の結果、セタシジミの採集されたのは17ヶ所で、大津市柳が崎沖、マキノ町海津西浜沖では、死殻さえも採集されなかった。
- (2) 最も多く採集されたのは、近江大橋下の18個/m²、磯、今西沖の16個/m²、近江舞子沖の12個/m²であった。
- (3) しかし、この採集量は20年前(24～53個/m²)にくらべ著しく低い値であった。
- (4) マシジミが尾上沖で54～130個/m²、八坂水試沖32個/m²、沖島沖22個/m²、あやめ沖20個/m²と各地で採集されたが、多くは0⁺稚貝であった。琵琶湖での成育が不可能であることが示唆される。
- (5) 貝曳網による採集調査は、海津沖と南湖の西岸域では藻の繁茂により調査不能であった。その他の水域ではセタシジミが採集され、最も多い水域は、あやめ沖の18個/m²、ついで白ヒゲ沖11個/m²、松原沖9個/m²であった。(図-1)
- (6) 貝曳網によるセタシジミの漁獲が主に営まれている水域は、5個/m²以上の所であった。(図-2)

- (7) 北湖と南湖で採集されたセタシジミの殻長組成には、差は認められないが、タテボシ、カワニナは南湖ほど大きくなっている。また、採集された貝類の重量組成でも、南湖ほどタテボシ、カワニナ、ヒメタニシの割合が大きくなっている。(図-3)
- (8) 松原沖では、制限殻長15mm以下の個体の漁獲割合が、40～55%とほぼ一定しており漁獲と再生産とのバランスを何とか、保たれているものと思われる。
- (9) セタシジミの多く生息している所は、 ϕ 2mm以上の砂礫が40%以上含まれ、 ϕ 0.25mm以下の砂泥が6.3%以下の所であった。また、0.25mm以下の砂泥が90%以上の所には、セタシジミは生息していなかった。
- (10) 貝採捕漁業者9人の9月から12月までのセタシジミ漁獲量は約26トンで、藻業区域は一部の水域に集中している。(図-2) 一人1日あたりの漁獲量は10kg～290kgと個人差がある。単価は250円～370円平均310円で、ほとんど地場消費されている。

8. 主要成果の具体的数値



・数字は1㎡当たり採集量
 ・●は主にセタジミを漁獲するために採集されている所

図-1 手繰第3種(貝曳網)によるセタジミの採集調査

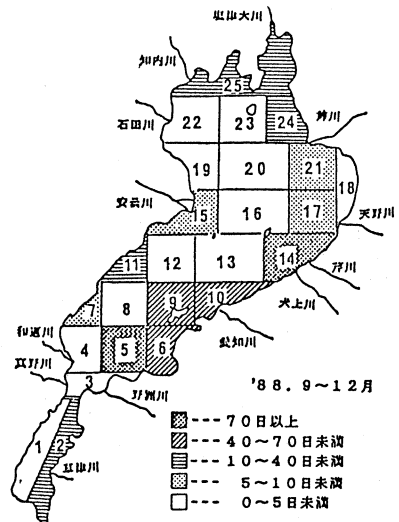


図-2 セタジミの漁獲状況調査

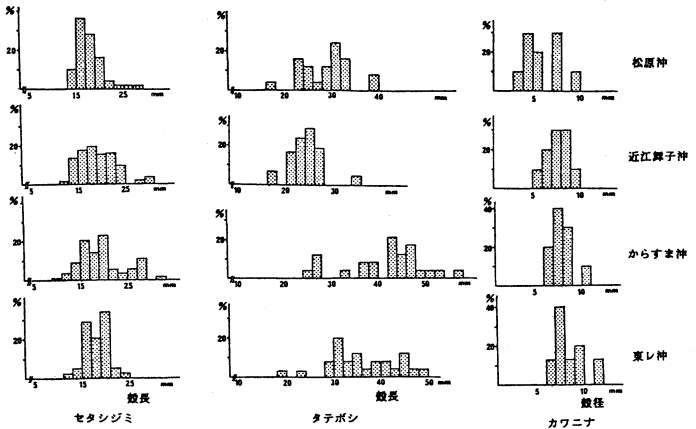


図-3 手繰第3種(貝曳網)で採集された主な貝類の体型組成(個体数)

9. 今後の問題点

資源解析の資料とするため、これらのデータの集積が必要であり、調査を継続実施するとともに、資源量を把握するためには生息範囲(面積)を算出することが必要である。

10. 次年度の具体的計画

同様な調査を継続実施するとともに、再生産の行われている水域は、湧水の影響も考えられるので、これらについて調査検討する。